蔦王 3

くる ひなた
Hinata Kuru

RB
レジーナ文庫

登場人物紹介

◀▼ 菫の両親

ヴィオラントの弟妹達

クロヴィス(24歳) ▶
グラディアトリアの宰相。

ヴィオラント (28歳) ▲
大国グラディアトリアの元・皇帯。
皇帯時代にすっかり表情を
失ってしまったが……

▲ミリアニス (25歳)
女性騎士。騎士団副長。

◀優斗(26歳)
菫の兄。

▲野咲(のさき) 菫(すみれ) (16歳)
異世界に迷い込んだ女子高生。
ドライな合理主義者だが、
人間関係には不器用なところも。

ルータス (28歳)▲
隣国の亜空間の研究者。

▲ルドヴィーク (18歳)
現グラディアトリア皇帯。

◀ちびセバス
セバスチャンの眷属(けんぞく)。

▲セバスチャン
ヴィオラントの実験で突然変異し、
今は彼の家の執事を務める動く蔦(つた)。

目次

1 蔦執事(つたしつじ)セバスチャン 7
2 壁の向こう側 30
3 繋がる二つの世界 77
4 セバスチャンの功績 134
5 兄と婚約者 188
6 伝えたかったこと 211
7 新しい家族 248
8 プロポーズをもう一度 282
9 癒(い)える日 331
10 蔦王(つたおう) 365

1　蔦執事セバスチャン

街道を、三台の立派な馬車が連なって行く。

それを感慨もなく見送るのは、のんきに草を食む羊ばかり。彼らが、先頭の馬車の窓から覗く少女の顔を気に留めることはない。

たとえ彼女が、この世界では滅多に見ない黒髪と、それ以上に稀なる紫色の瞳をしていようとも。

少女の名は野咲菫という。

ふわふわの髪がくすぐる頬は薔薇色で、鼻と口はちょこんと小さく愛らしい。対照的に、長い睫毛に守られた瞳は大きく、お人形さんのように可愛らしいと男女を問わず評判だ。

そんな彼女は、地球にある日本という国で女子高生をしていた。だが、二週間ほど前、兄と住んでいた自宅で火事に見舞われ、その際に起こった爆発に巻き込まれた。菫はその挙句、気がつけばこの異なる世界に飛ばされていたという、不思議な経験の持ち主で

ある。

「あー、羊さん達の群れ、ここで終わりかー。さようなら、羊さん」

行きに通った道を反対方向に走る馬車の窓の景色から、ついに羊の姿が消えた。一面緑の絨毯のようであった牧草地も、いつの間にか土がむき出しの地面に変わっている。

「もう間もなく国境だ。市街地に入る前に窓を閉めるぞ」

「はーい」

窓から半分顔を出して外を覗いていた菫に、優しく諭すように声をかけた男は、ヴィオラント・オル・レイスウェイク。彼は、菫が飛ばされた世界のレイスウェイク大公爵家の当主で、大国グラディアトリアの元・皇帝陛下でもあった。

日の光に透けるような白銀の髪と、菫と同じ紫の瞳は、どちらともこの世界では稀少な色。完璧なシンメトリーを描く美貌は、表情が欠落し、畏怖さえ覚える近寄りがたさをたたえているが、菫に注ぐ視線はそれに不釣り合いなほど柔らかい。

ヴィオラントは、元いた世界から突然弾き出されてしまった菫を保護し、いたく気に入ったばかりか結婚まで望むようになり、彼女に身分を与えるべく大貴族シュタイアー公爵家の養女に据えた。

彼はつい先日、そのシュタイアー公爵家の夜会に集まった貴族達の前で、菫が己の婚

約者であることを示して見せた。その上で、菫の元の世界と通じる手がかりを求め、亜空間の研究をしている幼馴染みに協力を仰ごうと、グラディアトリアの隣国コンラートを訪問したのが四日前。

その間、ヴィオラントの妹でコンラート王妃アマリアスの懐妊が判明したり、王の一番上の兄アーヴェルがヴィオラントに決闘を申し込んだりと、いろいろなことがあった。

何より、彼の幼馴染み――コンラート王の三番目の兄ルータスは、己とヴィオラントの師であった亡き植物学者ロバート・ウルセルが、十六年前にはすでに菫の世界の存在に気づいており、火事で飛ばされてきた彼女の世界の人形を持っていたと告げた。その人形というのが、今菫の膝の上にちょこんと載せられている、鮮やかな振り袖に身を包んだ市松人形だった。

菫のいた世界を〝隣り合う世界〟と呼ぶルータスは、二つの世界は力では破ることのできない壁に隔てられているが、炎を用いれば通り抜けられる可能性があると言った。そのためには、壁の向こう側からの協力も不可欠であるらしい。一番コンタクトを望めそうなのは菫をこよなく愛する彼女の兄だと踏んだヴィオラントは、彼女の自宅と直接通じている自らの屋敷に向かうべく、十日の予定だったコンラート滞在を早々に切り上げて帰路についたのだった。

朝早く、コンラート国王夫妻に見送られて王城を出発し、二時間ほど走ったところで両国の国境に差しかかる。ヴィオラントと菫の婚約の祝いにと、コンラート国王ラウルからは真っ黒い肉牛が、その長兄アーヴェルからは真っ白い乳牛が贈られたが、今回の帰国の一団に牛達は含まれていない。家畜用の荷車は馬車に比べて速度が遅いため、彼らは後からゆっくりついてくることになっている。

二国の共同の警備隊の詰め所に着くと、行きと同様、越境の検閲はごくごく簡単に済んだ。

ここからグラディアトリア領に入り、レイスウェイク邸まではほぼ半日かかる。

ヴィオラントと菫の乗る馬車を御していたレイスウェイク家の侍従長サリバンは、検閲の合間に馬達に水を与えて休ませ、他二台の御者もそれに倣った。そのうちの一方は、シュタイアー家の長男で、護衛騎士として同行しているカーティスだ。

もちろん、せっかく停まった馬車の中で菫が大人しくしているはずもなく、ヴィオラントの手を借りて馬車を降りると、ううんと両手を広げて伸びをした。すると、カーティスの馬車に乗っていたレイスウェイク家の女官長マーサが、困ったような顔をして降りてきた。その手には、鉢ごと籠に入れられた蔦植物、ちびセバスが抱えられている。

菫に〝ちびセバちゃん〟と親しまれる彼は、レイスウェイク家で執事を務める、意思を持ち文字を使って人間とコミュニケーションをとる不思議な植物、セバスチャンの新芽が独立して成長したものだ。

「マーサさん、どうかしたの？」

「お嬢様。先ほどから、この子がずっとそわそわとして落ち着きがないのでございます」

そうマーサが言う通り、ちびセバスはハート型の葉をしきりに蠢かせ、伸びた蔓を震わせている。菫が理由を問うても、本人にもよく分からないらしく、困ったように蔓を振るばかりで要領を得ない。

サリバンから水を分けてもらい、ちびセバスの根元に与えてみると、彼は一瞬気持ち良さそうに伸びをしたものの、やはり落ち着かない様子だった。

「ヴィー。ちびセバちゃん、どうしちゃったんだろう？」

「さて、私にもなんとも」

植物に詳しいヴィオラントが見ても、葉のつやといい蔓のしなりといい問題がないことから、ちびセバス自身の具合が悪いということはなさそうだ。しかし、彼を含め、セバスチャンの生態自体がいまいちはっきりしないので、何とも言い難い。もしかしたら、何か人間には分からない不穏な気配を感じ取っているのかもしれない。

妙な胸騒ぎを覚えたヴィオラントは、馬達を労っていた侍従長サリバンに出発するよう告げると、ちびセバスの葉を撫でていた菫を抱き上げ馬車に戻った。

国境を越えた三台の馬車は、しばらく何もない街道をひた走っていたが、太陽が空の真上に差しかかるころ、ようやく建物が立ち並ぶ市街地に入った。

ヴィオラントとの約束通り窓を閉めて座席に座り直した菫は、膝の上に抱いた市松人形の黒髪を撫でながら、帰ってきたのだなと実感する。その一方で、四日間滞在したコンラートではあの見事な緑の草原を満喫する暇もなかったけれど、アマリアスが出産するまでに、もう一度訪問できればいいなとも思った。

本当は、そんなずっと先のことよりも、今目の前にあることを考えなくてはならないのは分かっている。菫はこれからヴィオラントの屋敷に帰って、元の世界に帰れるか否かという問題と対峙しなくてはならないのだ。

いや、帰る以前にそもそも、ルータスの言うように本当に元の世界を見ることができるのか。そして、元の世界はまだ菫を受け入れてくれるのか。

不安に思い始めればきりがなく、早く屋敷に着いてほしいという思いと、その前に逃げ出したいという思いがせめぎ合い、息が詰まりそうになる。だから、菫は極力そのことを考えず、自分を誤魔化すように外の景色に見入っていた。

ヴィオラントもそんな思いを知ってか、菫をそっとしておいてくれた。

やがて大通りに入る頃には、街道を行き交う市井の人々の数も増え、馬車の速度も幾分緩やかになった。しばらくすると見覚えのある大きな門に差しかかり、それをくぐると塀と森林でぐるりと囲まれたレイスウェイク家の広大な領地に入る。屋敷までは、そこから一本道である。

ようやく屋敷の門に到着すると、サリバンは御者台から降りて門の中に声をかけた。幸い、ちょうど近くにいた使用人がすぐ門を開いてくれたため、そのまま中に馬車を乗り入れる。玄関の前で主人達を降ろそうとしたサリバンだったが、そこに別の馬車が停まっていることに気づき驚いた。

「――おや、お客様ですか？」

主人の留守中に、このレイスウェイク家に入ることを許される客人は限られている。先に玄関前に横づけされていた馬車には、記憶に馴染んだ皇帝家の紋章。

留守を預けたサリバンの息子が恭しく出迎えているのは、この屋敷の主人であるレイスウェイク大公爵の末弟にして現グラディアトリア皇帝陛下、ルドヴィーク・フィア・グラディアトリアと、ヴィオラントと唯一同腹の弟、宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵であった。

しかしそんな彼らが、主人が留守と分かっているレイスウェイク家に一体何の用で集まっているのか。サリバンも、そして窓から顔を出した菫も不思議そうに首を傾げた。

「ルドー。クロちゃーん」

馬車の音に気づいて振り返ったルドヴィークとクロヴィスは、車窓から身を乗り出した少女を見つけてぎょっとした。ヴィオラントは危ないと窘めつつ、窓からぴょんと飛び下りそうな菫を捕まえて抱えると、駆け寄ってきた弟達が開いた扉から降り立った。

その際ふと、玄関の方を見たヴィオラントと菫は、瞳に映った光景にはっと顔を強張らせた。

「セバスチャンっ……!?」

「これは、一体……」

レイスウェイク大公爵の屋敷は、内部はもちろん外壁から玄関の扉までセバスチャン、すなわち大量の蔦に覆われていたはずである。

しかし今、蔦は変色し、見るも無惨にぼろぼろと枯れ落ちかけているのだった。

執事の名を叫んだ菫は、ヴィオラントの腕から飛び降りて駆け出した。

「――スミレっ……」

その後を、思わずといった様子で追いかけていったのはルドヴィークだ。

そんな二人に続いて歩き始めたヴィオラントに、隣に並んだクロヴィスが話しかけた。

「兄上、随分とお早いお帰りですね」

「用が早く済んだので、さっさと帰ってきた。――それで、セバスチャンに何があった？」

その問いに、困り顔でクロヴィスが答える。

「それが……よく分からないのです。兄上達がコンラートに出発された翌日、ミリアニス姉上を通じてセバスチャンの調子が思わしくないと聞いていたのですが」

「というと、もう三日前からこんな状態なのか？」

「正確には、四日前の午後からだそうです。初めは、兄上とスミレの留守が寂しくて意気消沈しているだけかと思っていたのですが、やはり心配になって政務の合間に見舞いに来たらこの有様。一体どうしてしまったのでしょう……」

レイスウェイク家を守る屈強な戦士のごとく、太い蔓を伸ばして堂々としていた姿が嘘のように、今は細く乾いた身体を申し訳程度に壁に貼りつかせているだけだ。葉もすっかり枯れて茶色に変色している。それでもまだわずかに動ける様子だが、思うようにはいかないらしい。

その姿に愕然とした菫は、震える手を伸ばしてかさかさになった蔓を撫でた。

「ルド……セバスチャンどうしちゃったのかな。何か、悪いものでも食べたの……？」

「スミレ……」

菫にいち早く追いついたルドヴィークは、呆然と佇む彼女の小さな背中があまりにも寂しげだったため、手を伸ばして抱き寄せたい衝動に駆られた。しかし、何とか理性を総動員して思いとどまり、結局彷徨わせた手は彼女の肩に落ち着いた。

「四日前は何ともなかったのに。ちゃんと元気で、『いってらっしゃい』してくれたんだよ……？」

菫の今にも泣き出しそうな様子を心配したのか、セバスチャンは力を振り絞るようにして彼女にか細い蔓を伸ばす。菫はそれを労るように両手で優しく包み込んだ。

間もなく追いついてきたヴィオラントも、すっかり変わり果てた執事の姿を間近で見て言葉を失った。もちろん彼にも、セバスチャンがこうなってしまった理由に心当たりはない。

主人帰宅の知らせを受けた庭師のポムも、慌ててやってきた。自ら文字を書いて自己主張できるセバスチャンは、今までは栄養が足りない時は肥料をくれと訴えたし、水が足りない時は自ら根を伸ばして庭の池の水を吸い上げていた。しかし、彼は今、文字を書く力もないらしく、不調の原因がまったく分からないポムはほとほと困っていたようだ。

ヴィオラントは肩を落とした老庭師を労うと、力を失いしなだれる蔦をもう一度眺め、そしてレイスウェイク家当主として改めて執事に向かい合った。

「セバスチャン、留守中ご苦労だった。そなたの執事としての職務に一時暇を出す。屋敷を守ることより、己を守ることに専念しろ」

そのとたん、菫の掌をくすぐっていたか細い蔓は力をなくし、完全に枯れ落ちてしまった。

それだけではない。辛うじて玄関扉や外壁を覆っていた蔓も葉も一瞬にして枯れ屑となり、久しく隠されていた屋敷の本来の姿がすっかり露わになってしまった。

「――セバスチャンっ……!?」

あまりの有様に悲鳴を上げた菫を宥めるように、ヴィオラントは震えるその小さな身体を抱き寄せると、耳元にそっと顔を寄せて穏やかな声で語りかけた。

「大丈夫だ。玄関にあったのはセバスチャンの最も先端だからな。一番無理が出ていたのだろう。不調の原因はまだ分からぬが、おそらく根元は無事だ」

名を貰い執事の役職を賜った蔦植物は、ヴィオラントを主と崇め敬愛し、忠誠を誓っていた。

律儀な彼は、留守を頼むと言い置いて出かけていった主人の命に従い、不調をきたし

た身体で必死で屋敷にしがみついていたのだろう。帰宅したヴィオラントに休んでいいと言われほっとしたのか、枯れて再生不能な部分のみを自ら切り落として沈黙したのだ。

「ほんとに？　セバスチャン、死んじゃったんじゃないよね？」

「ああ。とにかく、根元の様子を見てみよう」

「根元って、どこにあるの？」

その答えとなる場所を思い浮かべたとたん、ヴィオラントは隣国コンラートから予定を早めてまで急ぎ帰国した理由を思い出してしまった。

「――私の、私室だ」

そう告げた瞬間、抱いていた小さな身体が、一瞬びくりとしたのが彼の腕に伝わってきた。菫も、本来の目的が何であったか思い出したのだろう。

レイスウェイク家当主の私室。

その場所こそが、菫が元の世界に帰れるか否かの鍵を握っている。彼女が命からがら越えた世界を隔てる壁は、今も確かにその部屋の中に存在しているはずなのだ。

しかし、菫はレイスウェイク家に世話になって以来、何度もその部屋で過ごしたが、一度として元の世界の存在を感じたことがなかった。それが彼女をずっと不安にさせている。

ルータスは、強く意識しないと見えないものなのだと言った。本当は、二つの世界はいつでもどこでも並行して存在している。しかしお互いに不干渉であるため、普通は見えないものなのだと。

菫は、元いた世界が見たい。自分が生まれ育った世界を見つけて、そこにいるはずの兄に、そして両親にもう一度会いたい。会って、自分は火事で焼け死んだのではない、今も別の世界で元気でいることを伝えたいのだ。

上手く自分の気持ちを伝えられるかどうかは分からない。

面倒なことから逃げてばかりで、友達にも両親にも真剣に向き合おうとしてこなかった菫を、兄は――元の世界は、再び受け入れてくれるのだろうか。

そんな不安は今でも菫の中でずっと燻（くすぶ）っていて、怖くないとは言い切れない。

（でも……大丈夫。――私は、一人じゃない）

「ヴィー」

「うん？」

菫が傍（かたわ）らに寄り添う長身を見上げれば、それに気づいた彼は目を柔らかく細めた。

――そうだ。向こうの世界にいる家族に、新しくできたこちらの家族を紹介するのだ。

自分を受け入れて愛し、菫にとっても特別な存在になり始めたヴィオラントを、胸を

張って紹介したいのだ。もちろん、動いて会話もできる賢い蔦の友達のことも自慢したい。
菫はヴィオラントの目を見て頷くと、「根元を見に行こう」と告げた。
師であるロバートからヴィオラントへ所有者が替わって以来、初めてこの屋敷を訪れたルータスも馬車を降り、壁を覆う枯れた蔦にひどく驚いた様子で歩いてきた。
馬車を停めたカーティスと、女官長マーサもやってきた。マーサの腕には、一緒に短い旅をしたちびセバスの籠が抱かれている。
「ちびセバちゃん……」
彼が道中そわそわと落ち着かなかったのは、親とも兄弟とも分身とも呼べるセバスチャンの不調を、無意識の内に感じ取っていたからなのかもしれない。菫が気遣わしげに名を呼んで籠ごと抱き締めると、ちびセバスは蔓を伸ばして絡るように彼女に絡み付いた。

久方ぶりに本来の装飾を晒した扉を開き、人々はレイスウェイクの屋敷に足を踏み入れた。
そうして、ひどく変わってしまった中の様子に再び愕然とするのだった。
それまでは、緑の紋様のように壁紙を覆っていた蔦が、無惨に変色して朽ち果てている。先ほどヴィオラントがセバスチャンに休むように命じたこともあってか、大半の葉がかさかさと床に落ちていた。

そうなっては、もはやただの枯れ葉でしかない。そのままにしておくわけにはいかないので、使用人達が箒を持ってきて掃除を始めた。仕方がないこととはいえ、セバスチャンの身体の一部がゴミのように処理されてしまうのは、見ていて辛いものがあった。
レイスウェイク家当主の私室は最上階、三階の一番奥にある。旅の疲れに一服することもなく、言葉少なに目的の部屋の前まで辿り着くと、部屋の主たるヴィオラントが扉の取っ手に手をかけた。
その際、ちらりと「いいか？」と確認するような視線を投げかけられて、菫はごくりと喉を鳴らす。それから彼の上着の端をちょんと摘んで、意を決したように口を開いた。
「ヴィー。私のことは、後回しで」
この扉の向こうに何が見えても――あるいは見えなくとも。今は自分が元の世界に帰れるか否かより、命の灯火を危うくしているセバスチャンのことを最優先にしてほしいと、菫は告げた。
そこには確かに自らの問題を後回しにしたいという臆病な思いも少しは含まれていたが、しかし菫にとってもセバスチャンはかけがえのない存在。得体の知れぬ自分を一番

最初に無条件で受け入れて気遣ってくれた彼に、菫は何度も心細さを癒(いや)された。
そして彼が持たせてくれた新芽は何度も菫を危機から救い、時折花々と共に黒髪を飾り、やがて土に根付いた〝ちびセバス〟は菫の新しい友達にもなった。
彼を回復させることが今一番大事なことなのだと、迷うことなくそう思う。
ヴィオラントはそんな少女に目を細め小さく頷(うなず)いてみせると、今度こそ取っ手を回した。
がちゃり――と音を立てて、扉が開かれた。
セバスチャンの核とも言える根の張った大きな鉢は、部屋の一番日当たりのいい窓辺に置かれていた。
そこから伸びた無数の蔓(つる)も葉も、まだ青々としたまま壁という壁を覆い尽くし、この部屋の中だけは二人がコンラートに出発した四日前とまったく変わっていないようにも見えた。
真っ先に室内に足を踏み入れたヴィオラントは、鉢の中に手を突っ込んで土の具合とその中に伸びているセバスチャンの根を検分した。
彼に続いて中に入った菫も壁際に走り寄って葉を撫で、いつも会話をする時に使っていたチョークを蔓の先に絡ませ黒板に導いてみた。しかし、やはりここでもそんな力は

残っていないらしく、蔓から落ちたチョークはその拍子に割れて白い破片を飛び散らせた。
菫の後に続いたルドヴィークとクロヴィスも、その様子を痛ましく思いながら見つめていた。
一方、セバスチャンが現れる前しか屋敷を訪れたことがなかったルータスは、緊迫する他の者達に構うことなく、緑に包まれた室内をぐるりと見渡してほうと感嘆のため息を漏らした。
さらに、菫の手からカーティスの腕に移っていたちびセバスをじっと見つめると、その葉を摘(つま)んで感触を確かめ、次いで壁際に寄ってセバスチャンのそれにも同じように触れ、「なるほど、本当に同じ種類のようだな」とつぶやいた。
最後に部屋に入った庭師のポムが近づいてくると、セバスチャンの鉢の横に片膝をついていたヴィオラントは彼に向き直った。
「根は腐っていないようだし、土にも栄養と水分は足りているようだな」
「はい。他の部分も、根に近い所は比較的元気なようです」
セバスチャンの大元の根はこの部屋にある鉢の中だが、そもそも広大な屋敷中に伸び広がった彼の身体を、この根だけで維持するのは到底無理な話である。だから彼は、伸

ばした蔓が外の地面に到達する度に節から根を伸ばし、水と栄養を吸い上げていた。ポムの話では、それら数多の根の近くの葉や蔓も、まだ枯れ落ちてはいないのだそうだ。

「セバスチャンが現れてもう二年か。初めの内は数日で一気に成長して……だがそれから大して伸びてはいなかったのではないか？」

「おお、おっしゃる通りです。一気に屋敷を覆ってからは、ほとんど現状維持に努めていましたな」

「あの爆発的成長が、例えば品種としての特徴ならば、必要な栄養がある限り延々と伸び続けるはずだ。しかし、何か思いがけない外的作用で一気に伸びたに過ぎないのならば……」

――いつか必ず、ガタがくる。

ヴィオラントはそう、小さくつぶやいた。

そもそも、セバスチャンが人間と意思疎通できる能力を得た原因も、その凄まじい成長力についても、誰も明確に説明できる者はいないのだ。

分かっているのは、彼が現れた時、ヴィオラントが植物の成長力を飛躍的に上げるための肥料の開発をしていたということ。そして、そのための実験の最中に突然の来客があり、ヴィオラントが少しの間席を外したということだ。

客が帰ってヴィオラントが戻ってくると、混ぜ合わせた物質を入れていた試験管にひびが入り、いつの間にやら元々の物質の他に、いくらかの土と、そしてハート型の葉を携えた蔓が入っていた。この実験に生活がかかっていない裕福な大公閣下は、試験管にひびが入ったのを確認した時点で、その日は実験を続行する気をなくしてしまい、土と蔓が入ったままそれを放置した。その場所に、ちょうど午後の日差しが差し込み、緑色の葉に降り注いだのは偶然だったのだろう。

ヴィオラントがその変化に気付いたのは、翌朝のことだった。

前日はわずかな蔓と二、三枚の葉だけだったそれが、たった半日で試験管から溢れるほどに伸びていた。葉の枚数も増え蔓も太くなり、先端は伸び上がって部屋の壁に貼り付き始めている。

さらにその日の午後には、いつの間にか出ていた根が試験管を割って飛び出した。

異様な事態に驚きながらも、ヴィオラントが大きい鉢に土を入れて植えてやると、それはますます成長を続け、その日の夜には彼の私室の壁をほぼ覆いつくした。

当然女官長マーサなどは最初はたいそう気味悪がって、なりゆきを見守るのん気な主を諌めもしたのだが、十日ほどしてついにレイスウェイク家全体が蔦に覆いつくされた頃、ある事件が起こった。

その頃、ヴィオラントはまだ皇帝を退いて間がなかった。在位期間に作った多くの敵の残党は、ほとんどが新皇帝ルドヴィークによって駆逐されたが、彼の目をかいくぐり復讐を目論む輩もまだ存在した。その内の一人がある夜遅く、レイスウェイク家に侵入しようとした。

侵入者は猛毒を塗った短剣を携え、明らかに先帝ヴィオラントを葬る目的でやってきていた。

ところが、突然のけたたましい悲鳴に起こされたレイスウェイク家の住人の目に映ったのは、無数の蔓に絡めとられてもがく若い男の姿。男は裏口から侵入しようとしたが、一瞬にして蔓に拘束されて無様に空中に吊り上げられたのだった。

それが、突如現れた不可解な蔦植物が、主人をこよなく愛するレイスウェイク家の使用人達に、心強い同志として認められた瞬間だった。

その後、意思があると気づいた女官長マーサが毎日優しく語りかけ、知性があると気づいた侍従長サリバンが文字を教え、ついに彼は筆談というコミュニケーション手段を手に入れた。

誰が呼び始めたのか〝セバスチャン〟という立派な名を貰い、冗談半分で与えられたはずの〝執事〟という役職を立派に務め、彼はレイスウェイク家において不動の地位を

築いた。

今は沈黙した執事の中枢たる太い幹を撫で、ヴィオラントは無表情の顔に憂いをのせた。

「無理をさせていたのだろうか。そなたがどこまでも伸びていくのを面白がり、伸び切れば今度は名と職務を与えた。そうすることで、そなたにずっと無理を強いていたのだろうか……」

もしかしたら、セバスチャンの成長力はもうとっくの昔に限界を迎えていたのかもしれない。それどころかその身体を維持するのでさえ、苦痛だったのではないだろうか。

初対面の菫に必要以上に構ったのも、今まで一度も他者に与えたことなどなかった新芽を二度も渡したのも、もしかしたら自分の寿命を感じていたからなのかもしれない。

だから菫が主の未来に光を灯す存在であることを誰よりも早く見抜いた彼は、この先も二人を守り続けるためにと、自らの子孫を世に送り出したのではなかろうか。そう考えると、セバスチャンはこのまま枯れ逝く運命なのかもしれない。

しかし、誰も彼を諦めることなどしたくなかった。

「あの時――これが現れた時と同じものを作れば、あるいはあのような成長力を与えた物質に巡り会えるかもしれぬ」

セバスチャンが現れた原因が、二年前のヴィオラントの実験にあるのは間違いない。彼はヴィオラントが放置した試験管の中の化合物を糧(かて)に成長したのだ。ある意味、〝植物の成長力を飛躍的に上げる〟という実験は成功していたと言える。

「確か、肥料の研究でしたね。どんな物質を使ったのかは覚えていらっしゃるのですか？」

「混ぜた物質は日付とともに記録してある」

「では、材料さえ揃えばすぐに作れるではありませんか」

さっそく手配しましょうと提案するクロヴィスに、しかしヴィオラントは少しばかり躊躇(ちゅうちょ)したのち、問うように見上げた菫に向かって気まずげに口を開いた。

「当時……私は退位したばかりで最もやる気のない時期だった。だから、研究だの実験だの言いながら、ほとんどは道楽のようなつもりでいたのだ」

「うん」

「一応は記録を残しながら実験はしていたが、それほど真剣でもなかったので……情けないことに、配合の比率までは記録に残していない」

ヴィオラントは誰よりも深いため息をつき、「ともかく記録を引っ張り出して、同じものを作れるかどうか試してみよう」と言った。

セバスチャンが動きもせず会話もできないのはとても寂しいことだが、生きていてく

れるのならばそれでいいと誰もが思った。彼の代わりに執事の役目をする者も必要だろうが、そこらへんは侍従長(じじゅうちょう)サリバンが上手くやってくれるだろう。

誰一人、セバスチャンから執事の役職を取り上げようと思う者はいない。それほど彼はこの家の者達にもその縁者達にも深く愛されていた。

その後、セバスチャンへの応急処置は、枯れた部分を切り落として一時成長を止め、現在残った部分を温存する方向でひとまず落ち着いた。

ヴィオラントは、庭師のポムには外に張ったセバスチャンの根の周辺に肥料をやるよう命じた。

侍従長はルータスの客室の手配に、女官長は客人のお茶の用意を整えるために席を外している。

部屋の中にいる人間は、ヴィオラントとその二人の弟と、菫とカーティス、そして、ルータスだけとなった。

2　壁の向こう側

セバスチャンの大元となる根の部分があるこの部屋は、一見彼の不調を感じさせることはない。そう、瑞々(みずみず)しい緑の蔦(つた)に覆われた壁は、コンラートに発つ四日前と変わらぬ様相で、菫の前に存在している。だが――

菫は目を泳がせた。あるいは、視線が定まらないと言った方がいいだろうか。実はこの部屋に足を踏み入れてからずっと胸がどきどきして、息をするのさえ苦しかったのだ。

恐る恐る菫が顔を上げると、壁際でセバスチャンの蔓(つる)に指を絡めていたルータスと目が合った。

もともとセバスチャンと面識がなかった彼は、自分以外の人間達が、やれ蔦が枯れた困ったと右往左往している様子を、ただずっと静かに眺めていた。別に、呆れていたわけではない。

ルータスとてヴィオラントと共に植物学を学び、その分野の研究者ともなった人物だ。当然他の者達よりよっぽど植物に通じており、思い入れもある。

しかし、今の彼が最も興味があるのは、この蔦植物(つたしょくぶつ)ではない。ルータスがはるばる隣国からレイスウェイク家にやってきた目的は、己(おのれ)の仮説を証明することなのだ。彼はじっと見つめてくる菫に何かを悟ったのか、ゆっくりと歩きながら口を開いた。

「蔦の話はひとまず落ち着いたようだから、当初の目的を思い出してもらってもいいか」

その言葉に、ヴィオラントは無表情ながらも意味ありげにルータスを見た。コンラートに同行したカーティスも、明らかに表情を強張(こわば)らせた。

ルータスは部屋の中央まで歩いてくると、ある一点を見つめて立ち止まる。

その視線が示すのは、ヴィオラントが研究用に使っている窓辺の長テーブル。まさに菫が現れた辺りだ。ただしあの時の爆発で壊れた場所はすでに綺麗に修繕がなされ、テーブルも新しいものが置かれていたが。

菫はそんなルータスの背中を見つめながら、自分の心臓がうるさいほどに脈打つのを感じた。

「俺が君達に言えることは、ただ一つ。今も確かにある――ということだ」

ルータスの視線の先を見て、菫もヴィオラントもカーティスも、ただただ沈黙した。

一方、話が見えないルドヴィークとクロヴィスは、彼らの異様な雰囲気に顔を見合わせる。

胡散臭そうな目で隣国の王兄を見ていたクロヴィスは、傍らの兄の顔を覗き込んで目を見張った。

「兄上……？」

その紫の瞳に映し出されているのは、明らかな驚きと戸惑いと――恐怖だろうか。

背を向けていたルータスが振り返り、話の通じている三人を順番に見据え、静かな声で問うた。

「君達には、何が見えているのか。ぜひ教えてほしい」

ルータスの問いに対し最初に答えたのはカーティスだった。皇帝家の信頼も厚い騎士団第一隊長でもある彼は、ちびセバスの籠を持つ手に思わず力を込め、震える声で告げた。

「壁の向こうに……部屋が、あります」

ルドヴィークとクロヴィスにはただの壁にしか見えない場所を凝視してそうつぶやいたカーティスは、一瞬痛ましげな表情を菫に向け、それっきり口を噤んでしまった。

そして、彼の後を引き継ぐように答えたのは、ヴィオラントだ。彼は数歩ルータスに近付くと、馴染んだ己の部屋の壁を見て目を細め、そしてわずかに躊躇しながら、それでも言った。

「……燃えた、ソファ。焼け焦げた壁、割れた窓――」

それを聞いたルータスは黙って頷き、そうして最後に立ち尽くす少女に視線を向けた。

「スミレ、君は？」

「……」

「スミレ、教えてくれ」

菫の顔は、見るからに青ざめていた。その反応から彼女の答えも察しているのだろうが、ルータスはあえて本人に言わせる気らしい。

菫はヴィオラントとは逆に数歩後ずさると、身体が震えるのを抑えるがごとく両手で己をかき抱き、そうして消え入るような小さな声でつぶやいた。

「――焼けた、うちのリビングだ……」

人の気配が感じられない、冷たく寂しい光景が、正面の壁の向こうに広がっている。

見間違えるはずもない。菫が兄とともに過ごした我が家の、無惨に変わり果てた姿。

――それはとても恐ろしい光景だった。

リビングのあちこちが火に舐められ、凄惨な形相に変えられてしまっている。

あの時、菫は確かにこの中にいて、あの家具達と同じようになす術もなく炎に包まれた。

一歩間違えば、呼吸を奪われ皮膚を焼かれ、苦しみながら誰にも看取られることなくこの世を去らねばならなかったかもしれない。たまたま同じ時、ヴィオラントの研究材

料が発火したことで偶然二つの世界が繋がり、菫はこちらの世界に渡ってこられた。
自分の命が助かったのは、本当にただの偶然でしかなかったのだと、菫は改めて思い知った。とたん、それまではどこか他人事だった死の恐怖が、物凄い勢いで足元から這い上がってきた。ぶるぶると勝手に身体が震えて、立っていられなくなる。
その場に崩れ落ちそうになった菫を、しかし救い上げるように力強い腕が支え、そのまま痛いほどの強い力で抱きすくめる。
恐怖に強張る四肢に染み込む、馴染んだ匂い。許容範囲を超える現実に押し潰されそうになった心を、今まで何度も救ってくれた力強い温もり。顔を上げずとも、もう菫にはそれが誰なのか分かっていた。
「――ヴィー……っ！」
悲鳴にしか聞こえない声で彼の名を呼び、菫は大きな身体に縋りついた。そんな彼女の頭をヴィオラントは掌で包み込んで、自身の胸に強く押しつけた。
「――よくぞ……よくぞ、私のところに来てくれた」
そう言う彼の声もわずかに震えているようだった。
その光景は、ヴィオラントにとっても不思議なものだった。
自室の見慣れた壁の向こうに、もう一つ見覚えのない部屋が見えるのだ。ぼんやりと

ではない。はっきりと違和感なく、まるで続きの間がすぐそこにあるかのように、立体的に視界に入ってくる。
見る限り、こちらの世界の一般的な内装とそう違いはない。天井はいささか低いようだが、だからといって頭を擦ってしまうほどでもなさそうだ。家具もこちらで見るようなものがいくつかある。
しかし、注目すべきはそんなことではない。目の前に現れたのは、一言で言えば〝惨状〟だった。
ヴィオラントの私室で起こった爆発など比ではない、凶悪で無慈悲な炎が暴れ回った痕跡が色濃く残っている。これこそが、愛おしい少女が逃れてきた光景なのだ。
それはそれは、熱かっただろう、恐ろしかっただろう。
もしも、あの爆発が起きなければ、彼女は炎に巻かれて無事では済まず、ヴィオラントは何も知らず誰も愛さず、この先もただ無難に生きていくだけだったのだろう。――ぞっとした。
「あんな所にそなたがいたのだと思うと、恐ろしくてならない。気が狂いそうなほどだ」
それほど、壁の向こうに見えた世界は生々しく、あの時の火事の激しさを物語っていた。
「ちゃんと見えてよかったな。だが正直、俺でもこの有様は言葉に詰まる」

元から〝隣り合う世界〟が見えていたルータスにとっても、壁の向こうの光景は衝撃だったようだ。

こちらの世界とあちらの世界の時間の流れに違いがないならば、壁の向こうもまだ火事があってから二週間ほど。現場の部屋を元のように戻すには、まだ時間が足りなかったのだろう。

この惨状を見る限り、少なくともここで生活するのは無理だ。他の部屋が無事なら菫の兄はまだこの家に住んでいるかもしれないが、何にしても今は人の気配がまったく感じられなかった。

こちら側から一方的に干渉しようとしても、意味がないのだとルータスは言った。

両方の世界を繋ぐ鍵は火であり、それを同時に同じ場所に当てなければ、二つの世界は永遠に並行して存在するだけ。向こう側に協力者が現れない限り、手も足も出ないのである。

菫達に元の世界が見えたからといって、やはりすぐに全てが解決するわけではなかった。

「セバスチャンが大変だという時に、一体何をしていらっしゃるのですか？」

そんな中割り込んできた末弟のむっとしたような声に、ヴィオラントは黒髪に埋めて

いた顔を上げ、彼をちらりと見た。

もう一人の弟にも視線をやると、彼もルドヴィークと同じことを聞きたがっている様子だ。

二人からすれば、長兄達は何の変哲もない部屋の壁を前に、揃って顔色を悪くしているようにしか見えないのだろう。おまけに途中で崩れ落ちた菫をヴィオラントが支えたかと思うと、そのまま固く抱き締め合って、完全に二人だけの世界に入ってしまった。

実際はそんなのん気な状況ではないのだが、何も見えないルドヴィークとクロヴィスにしてみれば、置いてけぼりをくらったようでまったくもって面白くないらしい。

その様子を確認したヴィオラントは、再び鼻先を菫の黒髪の中に埋め、彼女の小さな身体を抱き上げてから、「――カーティス」と実直な騎士の名を呼んだ。

「ルータスから聞いたスミレの世界とこの世界の事情を、ルドヴィークとクロヴィスに、そなたから説明してやってはくれまいか」

「はい……私でよろしければ」

本来ならば、その事情に関して最も詳しいルータスが説明するべきなのだろう。

しかし、筋金入りの真面目人間と名高く人望も厚いカーティスの方が、弟達が信じやすいのではないかと判断したのだ。もちろん、彼らが敬愛する長兄ヴィオラントが説明

するのが一番なのだが、ヴィオラントは愛しい少女の相手でそれどころではない。
指名を受けたカーティスは、自分がでしゃばることでルータスのプライドを傷つけはしないかと心配したが、当の本人はまったく気にする様子がない。それどころか、彼の興味は壁の向こうの光景にしかないようだった。
かくして、重大な任務を与えられてしまったカーティスは、訝しげな皇帝と宰相相手に自分の聞いた話をまるまる献上し、今この部屋に繋がる、二人には見えない世界の説明に繋げた。
「つまり？　あなたや兄上達には、あの壁の向こうに違う世界が見えているというのですか？」
「はい」
「それを、信じろと？」
「……恐れながら」
カーティスの説明を聞き終わったクロヴィスは、こめかみを指で揉みながら、ますます訝しそうな表情になった。
彼とて、誠実な騎士団第一隊長が嘘や冗談を言っているとは思わない。けれど、自他ともに認める現実主義者のクロヴィスにとっては、にわかには信じがたい話であった。

「私はね、自分の目で見たものしか信じないんですよ」
クロヴィスはそう言うと、両腕を胸の前で組んで、皆がこぞって視線を向ける壁を睨みつけた。
「クロちゃんには、向こうの世界が見えないの？」
そんな彼に菫が声をかける。青ざめていた彼女の顔色は、守るように包み込む男に温められてか、いつもの甘いものに戻りつつある。
その愛らしい人形のような顔を眺めつつ、現実主義者の宰相は深くため息をついた。
「見えませんね。私の目の前にあるのは壁。壁の向こうは屋敷の外。それ以外の何ものでもない」
「でも、ほんとにあるんだよ。私はそこから来たの。私の世界はそこにあるの」
「あなたの世界は、もうここでしょう？　すでに兄上と婚約を交わしておきながら、まだ元の世界とやらに未練があるのですか」
これほど兄に深く愛されているというのに、見えない世界を求めるような少女の言葉に、クロヴィスは苛立った。いつも冷静な彼らしくない。
「よせ、クロヴィス」
「……失礼しました」

そんな弟を、ヴィオラントは短く窘めた。

確かに今のは大人げない言葉だったと気づいたクロヴィスは、ばつが悪そうな顔をして小さく詫びた。そしてもう一度壁の方に視線を向け、やはり何も見えないことを確認すると、兄にくっついている少女に向かって口を開いた。

「とにかく。見えないものを信じることはできません。ねえ――ルド……？」

クロヴィスと同じく、ルドヴィークにとっても〝壁の向こうの世界〟など寝耳に水だったはずだ。

ところが、同意を求めるクロヴィスの視線の先で、彼はさっきから一言も発しないまま、ある一点を凝視している。嫌な予感に口を噤むクロヴィスをよそに、無言で歩を進めたルドヴィークは、件の壁の際まで来るとそこに両手をついて顔を近づけた。背後のクロヴィスからすれば、彼は壁にただ顔面を押し付けているようにしか見えないのだが。

「……」

しばらくの間、この部屋の中にいる全員が、若き皇帝の後ろ姿を黙って見守った。

すると、彼は急に振り返りきょろきょろと何かを探す素振りをし、相変わらず長兄の腕に包まれている菫を見つけると、いささか興奮した様子で声をかけた。

「スミレ、あれは何だ？」

「――あれ？」

ヴィオラントの腕の中でようやく落ち着きを取り戻した菫は、抱き上げられていた腕から飛び降りて、子供のように顔を上気させたルドヴィークのもとに走り寄った。

「ルド、何？」

「あれだ、あれ。真正面の――ほら、焼け残った棚の上にある、透明の四角い箱に入った」

「……」

「ほらあれ、見えるだろう？　ただの置物にしては精巧な作りに見えるが……」

年相応の少年らしい眼差しが一心に見つめる方向にじっと目を凝らした菫は、それからもう一度、隣のルドヴィークを見上げ、もしかして……と口を開いた。

「あれかな、大和のことかな？　戦艦大和の模型」

「ヤマト？　センカン？」

そこにあったのは、菫の兄が飾った精密な巨大戦艦大和の模型だった。

兄が専用の収納ケースにしまったそれを、ほくほくしながらリビングの戸棚の上に飾ってから随分と久しい。彼は地道にこつこつとパーツを組み立て、実物の数百分の一スケールで忠実に再現されたこの模型を完成させたのだ。そんな気長な趣味が理解できない菫は、こっそり三連機銃部分に自分のピンクのラメ入りネイルを塗り、兄に半泣き

の形相でこっぴどく叱られた覚えがある。あの時は、「こんな可愛い悪戯も笑って許せないなんて、お兄ちゃんは心が荒んでる！」と逆ギレしたものだ。だが、今はそんな思い出に浸るよりも――

「……ルドってば、見えてるの？」

驚いたように問う菫の顔に若き皇帝ルドヴィークは片眉を上げ、こともなげに言い放った。

「見えているさ。カーティスの話を聞いたら、たちまち見えるようになったが？」

「……あ……そう……」

「ルドまで、どうなってるんですかっ……!?」

二人の背後からクロヴィスの愕然とした声が聞こえてきた。

「それで、センカンヤマトって何なんだ？　あれは、何をする物なんだ？」

下の兄の反応をよそにルドヴィークは空色の瞳をきらきらさせて、壁の向こうの世界を見つめている。

大国グラディアトリアを長兄より譲られて皇帝となり、日々政務をこなす堂々たる姿に周囲はつい忘れがちだが、ルドヴィークとてまだ弱冠十八歳。この世界の成人の年齢を越えているとはいえ、まだまだ端々に少年らしさが残る年頃だ。

菫の方が彼より二つばかり年下なのだが、性格的に大人びたところのある彼女から見ると、おもちゃを見つけて顔を輝かせるルドヴィークは、小さな弟のようでちょっと可愛いな、と思った。

「あれはねぇ、私の国で戦争に使われた、大和っていう船の模型だよ」

「戦争……っ!?　スミレの国には戦争があるのか？」

「大昔にね、あったんだよ。今は私の国ではしてないよ」

「……そうか」

グラディアトリアやその周辺の国々では、幸いもう長い間、国家同士の争いは起こっていない。

だから、実はルドヴィークも、ヴィオラントでさえも〝戦争〟というものを経験したことがない。当然、能天気な菫の口から飛び出したその言葉に一瞬ぎょっとしたのだが、過去のことだと聞いてほっと胸を撫で下ろしたルドヴィークは、気をとり直してまた問いを投げる。

「戦争に使われるような船の模型が、何故お前の住まいに置いてあるんだ？　兄上は、何か国家の防衛に関係する職務に就いていらっしゃるのか？」

「ちがうよ、うちのお兄ちゃんは教師です。あれは、ただの趣味の塊」

菫の後を追うように壁の方に寄ってきたヴィオラントも、ルドヴィークが興味津々の模型を眺め、感心しているようだ。ルータスもカーティスもわらわら寄ってきた。

大体男子という生き物は、船だとか電車だとか飛行機だとか車だとか、乗り物には一様に反応するようにできているのだろうか。実物の戦艦大和は、あの模型の何百倍も巨大で、海に浮いて高速で進んだんだよと、菫が兄からの受け売りの知識を披露すると、男達は面白いほど驚いてくれた。

並大抵の気合いでは完成させられないだろう戦艦模型を、兄は頑張って作っていた。完成品にぴったりのディスプレイケースに収納し、それをリビングに飾った時の彼の誇らしい顔を、菫は今でも憶えている。

「お兄ちゃんがめちゃくちゃ大事にしてたやつだから、燃えてなくてよかったよ」

下の戸棚はいくらか焦げが見られるが、幸いケースのおかげで消火の放水からも逃れられたらしい。兄の力作が無傷と分かって、菫は安堵した。

「……なるほど。では、そんな大事なものをまだ置いているということは、兄上がこの部屋に出入りする可能性は高いということだな」

「え……？」

ヴィオラントの言葉に、菫ははっとした。

正直言うと、壁の向こうに見えたリビングのあまりの惨状に、もうこの部屋は家族に捨てられたんじゃないかと思っていたのだ。

悲惨な状態のまま取り残された室内の光景は、あまりに虚しく寂しい。もうここを訪れる者は誰もいないのではなかろうかと、菫は自分まで取り残されたような気持ちになって心細かった。

だが、ヴィオラントの言う通りだ。もしも、この先リビングを放置するのであれば、貴重品の類いは他の部屋に移動させるだろう。忙しさと混乱でそこまで意識が回っていないという可能性も否定できないが、だけど。

兄はまた必ず、この部屋に来てくれる――きっと、絶対、また会える。

立派な戦艦の模型は、菫にそう希望を与えてくれた。

ところで。

ただ一人、いまだ菫の世界を見ることができない者がいた。ヴィオラントの上の弟クロヴィスだ。

彼は何だか納得のいかないような顔をして、件の壁に背を向ける形でソファに座り込み腕を組んでいる。それに気づいた菫がツツツ……と背後から近づき、ソファの背もたれ越しに覗き込むと、クロヴィスはつむっていた目を薄く開けて、いかにも不服そうに

「何ですか」と問うた。
「クロちゃんってば、仕事しすぎで疲れてるんじゃない？」
「余計なお世話ですよ。——ちょっと、肩なんか揉んでいただかなくても……」
「うわっ、カチコチ！」
そう言って力をこめた菫の小さな指先が、肩のツボを適度に刺激して心地よく、ついつい黙り込んでしまうクロヴィスだった。
その後、思いがけずすっきりしたらしい彼は、肩をぐるぐる回しつつ背後を振り返り、もう一度件の壁に挑戦してみる。が、残念ながら結果は同じだった。
「あると信じて見れば、おのずと見えてくるのではなかったのですか？」
「君は信じているつもりなだけで、本当は異世界なんてないと思っているんだ。だから見えない」
明らかに悔しそうなクロヴィスのつぶやきに、にべもない言葉を返したのはルータスだった。
「心に、余裕がないんだな。性格的に、夢を見るには向いていないんだよ、君は」
「……ほう」
のほほんと言うルータスには特に悪意はないのだろうが、おそらく彼は知らない内に

敵が増えているタイプの人間だろう。一度きつく彼を睨みつけたクロヴィスだったが、眉間に立派な皺をこしらえたまま再び視線を壁の方に巡らせて、誰とはなしに問いかけた。
「向こうにある世界とやらが見えたとして、いきなり簡単に行き来できるものなのですか？」
「いいや。こちらからの一方的な干渉ではどうにもならない」
それに答えたのは、やはりルータスだった。彼は、興味がある話題には食い付いてくる。その相手が、明らかに相性の良くないクロヴィスであっても気にしない。
「それでは、スミレが突然元の世界に戻ってしまうということも、ないと思っていいですか？」
「理論的には」
「結構です」
ルータスの答えに満足したらしいクロヴィスは振り返りつつ立ち上がり、まだ背後に立っていた菫の前に立った。
思いっきり見下ろされる形になった菫は、自分に降り注ぐ視線に生易しくない想いが含まれていることを感じ取り、傍らに来ていたヴィオラントの袖をきゅっと掴んだ。そ

んな少女を鋭く見据えて、クロヴィスは口を開く。
「あなたが元の世界を恋しく思うのは当然ですし、それが見えるようになって嬉しいのも分かります。――ですが、これだけは覚えておいてください」
彼は口元には柔らかな笑みを浮かべながらも、鋭い瞳で菫を脅しにかかる。
「我々は、すでにあなたを兄上の伴侶と認めました。公爵家の夜会において発表された婚約は、あの場にいた全貴族が証人です。滅多な理由でそれを破棄することはできないし、もちろん元の世界に帰って、なかったことにする、などということはさせませんよ」
「そんなこと、しないよ」
「その言葉、お忘れなきよう。――もしも、兄上を裏切るようなことがあれば、我々はあなたを許しませんから」
「――クロヴィス」
その言い様に、ヴィオラントは再び窘めるように弟の名を呼んだ。
菫が本当に異世界から来たのだと認めた時、クロヴィスはいつかその世界が彼女を取り戻しに来るのではないかと不安になった。今さら彼女を手離せないのは、何も兄だけではないのだ。
それなのに今、すぐそこに菫の世界は口を開けているというではないか。しかも、そ

の忌まわしい存在が自分にだけは見えないと知って、クロヴィスの不安と苛立ちは膨れ上がる一方だった。そんな負の思いに任せてまたも大人げない発言をしていることは自覚しているのだが、止められなかった。
だが――やはり、菫は菫であった。クロヴィスがよく知る令嬢達のような、着飾った可愛らしいだけの箱入り娘とはわけが違う。
菫は、ヴィオラントの袖をきゅっと確保し保険をかけるという強かさを見せつつも、鋭く厳しい目を向けるクロヴィスをまっすぐに見上げた。そして、背伸びをして空いている方の手を伸ばし、彼の肩をぽんぽんと叩いてみせた。その肩には、先ほど凝りを揉みほぐしてくれた小さな手の感触と温もりが、まだじんわりと残っている。さらに菫の表情はというと。
「……何なんですか。何をそんなに、にやにやしてるんですか」
長姉アマリアスや貴族の令嬢達が夢中になった、愛玩人形クリスティーナそっくりの可憐な顔に、菫は悪戯っぽい笑みをのせていた。
「クロちゃんってば、意外にカワイイとこある」
「……すごく、馬鹿にされているような気がするんですが？」
「よしよしよし、大丈夫。おねえちゃまは、クロちゃんに黙っていなくなったりしない

から」

菫はそう言うと、ぐいっとクロヴィスの上着を引っ張って引き寄せ、彼の金色の頭を小さな手でわしゃわしゃと撫で回した。

「……〝オネエチャマ〟？」

「それに、向こうの世界が見えないからって、クロちゃんが気に病むことないんだからね？」

「……」

「ひねくれてるとか、汚れちまってるとか、夢がないとか、そんなこと全っ然……思ってないから」

「……思ってるんですね」

家族以外で、クロヴィスにここまで遠慮なく接する人間は、今までなかなか出会えなかった。

優れた頭脳と政治手腕で国内外から賞賛を浴びつつも、兄弟の中で誰よりも冷めているクロヴィス。その性格は作り笑顔などでは隠し切れない。長年仕えた部下達も、いまだ彼の前で話す時は緊張するというのだから、菫のような少女が気安く相手にできる男ではないはずだ。

しかし、そんな畏怖も先入観もない彼女の不躾なほど屈託のない態度は、時に新鮮で時に楽しく、自分は皇族であり宰相である前に、ただの人間なのだとクロヴィスに気づかせた。菫はたやすく、クロヴィスの肩の凝りだけでなく、心の凝りまでもほぐしてしまう。さらには――

「……っ……」

「――あっ、兄上……!?　今、笑いましたっ!?」

二人のやり取りがツボだったのか、かすかに噴き出したヴィオラントにクロヴィスは目を見張った。そんな三人を見守っていたルドヴィークとカーティスも、その衝撃的な瞬間に、二人仲良くぽかんと間抜けな顔をする。ルータスだけは相変わらず反応は薄かったが、それでも唇を笑みの形に引き上げた。

残念ながら、奇跡の笑顔はすぐさま元の無表情に戻ってしまったが、それでも、一番近くで見た菫は、クロヴィスに向けていたにやにや笑いを輝くような笑みに変え、ヴィオラントの手をきゅっと握った。そして、同じく近くで奇跡を目の当たりにし、乱れた金髪も整わないままのクロヴィスに向かい、もう片方の手を差し出した。反射的に、その小さな掌を取ったクロヴィスは、不思議そうに眼鏡の奥で瞳を瞬かせる。

「クロちゃん、ほら、ハグ」

「ハグ？」

菫はそう言うと、戸惑った様子のクロヴィスの手をまたもぐいっと引っ張り、それに素直に従って身体を傾げた彼の首筋に腕を回して、むぎゅうっと抱き締めた。

「……っ!?」

「嬉しい時、素敵なことがあった時は、ハグだよ」

突然のことに身を強張らせたクロヴィスをぎゅうぎゅうと締めつけながら、菫はさらに逆の手をヴィオラントの腰に回す。そして、渾身の力を込めてぎゅうーっと二人を抱き締める。

ふふ、と頭上から降ってきた柔らかな笑い声に気づいたクロヴィスは、呆然とした面持ちのまま、戸惑うとともに安堵するという、矛盾した思いを感じていた。

少女の肌は柔らかで、頬をくすぐる珍しい黒髪は敬愛する兄と同じ匂いがした。

異世界から来た少女は、もうすでに未知の存在ではなく、この世界に生きる自分達と変わらず血が通い心を持つ人間なのだ。そして、そんな菫が元いた世界というのも、実はこちらの世界と何ら変わらぬ、恐れる必要のないものなのだと、ようやく彼は思い至った。

認めるのは悔しいが、クロヴィスの心の奥底には未知の世界を恐れる気持ちが存在し

ていて、それが彼の視界から壁の向こうの光景を遮断していたのだろう。

――今なら、見えなかったものが見えるような気がする。

意を決したように顔を上げたクロヴィスは、菫を首筋にくっつけたまま、自らが無意識に拒絶していた壁の向こうを見た。

それが、未知なる世界が彼を受け入れた瞬間だった。

「……さぞ、熱かったでしょうに」

「クロちゃん？」

クロヴィスは目に飛び込んできた光景に、兄ヴィオラントの瞳に浮かんだ恐怖の理由を知った。

そして、自分を抱き締める少女を護った奇跡に胸が詰まり、思わず彼女を抱き締め返していた。

「……もしかして、見えた？」

耳元に囁かれた穏やかな声は、クロヴィスが無言で小さく頷くと、たちまち嬉しそうに弾んだ。

「クロちゃんにもピュアなところ、あったぁー！　ほらっ、ルドもおいでっ！」

テンションの上がったらしい菫は、彼女にされるがままの兄二人に唖然としていたル

ドヴィークをも、ついでとばかりに呼びつける。
戸惑いながらも素直にやってきた末っ子皇帝は、長兄のほのかに和らいだ無表情と、次兄の憑き物が取れたような穏やかな顔を見て、ほっと安堵のため息をついた。そのとたん、ヴィオラントの腰から一度腕を外した菫に、ぐいっと胸ぐらを掴んで引っ張られてバランスを崩し、彼女を芯にした兄弟団子に巻き込まれてしまった。
それを見て騒ぎ出したのが、それまで大人しくしていたちびセバスだ。
ずるいずるいというように蔓を振り回したちびセバスは、「こ、こらっ」と諌めるカーティスの腕の籠から鉢を付けたまま飛び出し、塊になってる皇族兄弟と慕わしい少女の間に割り込もうとした。ところが――
「……なんですか、この図々しい鉢植えは」
彼の真ん中の一番太い茎を掴み上げてそう尋ねたのは、菫の腕を解き一転冷たい目になったクロヴィスだった。
「おねえちゃまのお友達、ちびセバちゃんだよ。仲良くしてあげてね」
顔を赤らめ初心な反応をするルドヴィークをぎゅうぎゅうハグしながら菫がそう答えると、クロヴィスは目を細めてちびセバスをじろじろと眺め、くすっと不穏な笑みを浮かべた。

「セバスチャンは立場をわきまえた実に慎ましく立派な執事でしたが、このおちびさんは躾がなってないようですね。いいでしょう、私の執務室に来なさい。いずれセバスチャンを補佐できるように、みっちり教育して差し上げます」
「……っ、やめたげてぇ！」
「それはあまりにも気の毒だろう」
クロヴィスの突然の提案に菫は悲鳴を上げ、ルドヴィークは口を引きつらせたが、実はちびセバスが菫にベタベタしすぎるのを快く思っていなかったらしいヴィオラントが、無言で頷いて了承してしまった。
蔓をぶんぶんと振り回して嫌がるちびセバスをむんずと掴んだクロヴィスは、菫に向き直った。
「さっきの約束、忘れないでくださいよ」
「うん？」
「黙って元の世界に帰ったりしないでください。兄を――私達家族を悲しませないでくださいね」
クロヴィスはそう懇願するように、切なく揺れる瞳で菫を見つめて言った。そして、視線を彼女の傍らのヴィオラントに移すと、今度は悪戯な笑みを浮かべて続けた。

「スミレがふらふらしているのは、我々にとっても不安です、兄上。早急に式を挙げるなり子を仕込むなり、確かなものが欲しいのですが？」
「うむ、それは重々……だが、口惜しいがスミレの世界の法律にのっとると、式は彼女の兄上に許可をいただかねば進められない。兄上がいるはずの世界が見えただけ、前進したと思いたいが」
「そうですか。では今後に期待します」
「後者も、目下遂行中だが、いまだ成果は定かではない」
「……幸運を祈ります」
わずかではあるが無表情に楽しげな色をのせるようになった兄に、クロヴィスは温かい気持ちになった。
それから、無駄な抵抗を続けるちびセバスを捕えたのと逆の手で、弟ルドヴィークの首根っこをむんずと掴むと、戦艦大和に後ろ髪を引かれる彼を引きずっていく。
「さあ、仕事仕事。そろそろ帰りますよ、ルドヴィーク」
若き皇帝陛下は「――また、絶対来るからっ！」と、レイスウェイク家の廊下に声を響かせつつ宰相とともに王城へと帰っていった。
カーティスも王城に赴き、今回のコンラート訪問に関して報告書を提出しなければな

らず、彼らとともに大公閣下の屋敷を辞した。

「さて、静かになったな」

そうヴィオラントがつぶやいたように、レイスウェイク家当主の私室――〝隣り合う世界〟に繋がる部屋には、彼と菫、そしてルータスだけが残された。

不調が心配されるセバスチャンの対症療法として、この部屋にある彼の心臓部とも言える大元の鉢に、とりあえず既存の肥料とたっぷりの水が与えられた。

そんな様子を眺めながら、菫は傍らに寄り添うヴィオラントを見上げて言った。

「ねえ、セバスチャンにも、向こうの世界が見えていると思う？」

「さあな。植物である彼の〝見る〟という感覚がどういうものかは想像がつかぬが、先入観や偏見に支配されやすい人間と違って、彼はいつも物の本質を見ているのではないかとは思う。だから、そこに確かにある世界をそのまま見ることなど、セバスチャンには当たり前のことなのかもしれぬ」

壁の向こうは、相変わらず何の動きもない。しかし、火を免れた壁かけ時計が無音で時を刻んでいるのが見えるため、時間が止まっているわけではないようだ。

今の時刻は、午後二時ちょうどを回ったところ。こちら側の時間もほぼ同じ頃合いで

あることから、互いの世界に時間の流れのズレはないようだ。

菫がこちらの世界に飛ばされてきた日を含んで今日で十五日目。向こうでも同じくらいの日数が経っているはずだ。

火事があった日は、金曜日だが祝日で、三連休最初の日。通常なら教師である兄も休日であるが、その日はたまたま模試があって出勤していた。その日から順番に数えて十五日後の今日も、向こうの世界では金曜日だ。金曜日の午後二時というのは、まだまだ兄は教鞭を振っている時間なので、今までの帰宅時間を考えると彼がこの部屋に顔を出すのは早くても夜の七時以降だろう。それでも、菫としては向こうの世界のどんな小さな動きも見逃したくなくて、ずっとこの場で見張っていたい気分だった。

ところが、そんな彼女の思いなど見通しているヴィオラントに、先に釘を刺されてしまう。

「スミレ、気になるのは分かるが、食事と睡眠の時間はきっちりとりなさい」

「でも……」

「それが約束できないのなら、そなたをこの部屋に入れないことにする」

「……」

「スミレ、返事は？」

「……分かった」

ヴィオラントがすると言ったら本当にするのを知っている菫は、しぶしぶながらも頷いた。そんな菫の髪をヴィオラントは「いい子だ」と、優しい目をして撫でる。

それから、ヴィオラントはセバスチャンが現れた時の実験の記録を漁り、同じく植物の専門家であるルータスと資料を見ながら談義し始める。

それをよそに、菫はソファを一脚引きずってきて件の壁の前に陣取り、向こうの部屋に誰かがやってこないか一生懸命見張っていた。

しかし、夕刻までの間に動いたのは、結局壁掛け時計の針だけだった。

夕食の時間になると、すっかり通常業務に戻った侍従長サリバンが呼びに来て、菫はソファに膝を抱えて座った体勢のままヴィオラントに抱き上げられて、食堂に強制連行された。上の空で料理をつついているとヴィオラントに窘められ、それに生返事をするとため息をつかれた。

ある程度食べないと食卓から解放してもらえなかったので、半分意地になってノルマ分を平らげた菫が、ご馳走様の挨拶もそこそこに件の部屋に戻ると、向こうの壁掛け時計はそろそろ七時を回ろうかという頃だった。

焼けたリビングの奥に見えるドアは、玄関から伸びる廊下に続いている。いつそのド

立ち読みサンプルはここまで

アを開けて兄が帰ってくるかもしれない。そうなれば、兄はソファに膝を抱えて座り込む菫と、真正面に顔を合わせることになる。

「でも……お兄ちゃんにも、いきなり見えるとは限らないんだよね……」

ついつい、菫は自分でテンションの下がるようなことをつぶやいてしまった。

その時、彼女が座っているソファがキシリと音を立てた。はっとして横を向くと、いつの間に部屋に入ってきたのか、ヴィオラントがソファの肘かけに腰を下ろしていた。

「ヴィー……」

「……まあ、こうなることは大体予想していたが」

彼は元の世界に夢中になる菫の気持ちは理解していたが、それが原因で彼女の日常がままならなくなるのは見過ごせなかった。彼の片手には、皮を剥いて一口大に切り揃えられた、リンゴに似た果物の皿が掲げられていた。ヴィオラントはその一欠片をフォークに差して、菫の口の前に差し出す。菫が大人しくそれを口に迎え入れると、彼はいくらか満足したようだった。

壁掛け時計の時間は、すでに七時を大きく回ってしまった。

あのドアを開けて、菫の兄が入ってくるような気配は、まだない。

菫が果物をしゃくしゃくと咀嚼する音だけが響く中、ヴィオラントは穏やかに口を開